

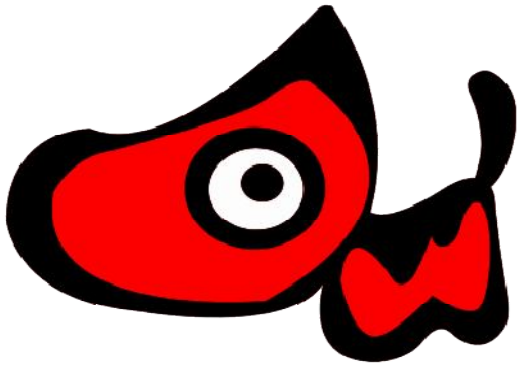
「赤べこの絵付け(1)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

私は小学生時代、八王子市の郊外に住んでいた。両親とも外食が好きで、よく自家用車で夕食に連れていってくれた。その中の一軒に「あかべこ」というお店があった。今はあるかどうかわからないが、ステーキのお店だったと思う。「あかべこってなあに？」と聞くと、母が「福島県会津の郷土玩具よ」と教えてくれたのを覚えている。「べこ」が「牛」の意味ということもその時に知った。お店の人に、小さな「赤べこ」のおもちゃももらえて、とてもうれしかった。



会津地方、特に会津若松市では、赤べこを観光資源として宣伝し、「あかべえ」というキャラクターにしている。シンプルだが、かわいらしいデザインで、子どもたちに人気がある。



市内を走る周回マイクロも「あかべえ号」といって、200円で市内を一周できる。絵は白虎隊終焉の地として有名な飯盛山付近を走る「あかべえ号」。車体は真っ赤で、「あかべえ」がラッピングされている。

8月下旬に、6年生の子どもたちと裏磐梯林間学校に行ってきた。林間学校は、遠足とちがって延期や中止ができないので、どうしても「雨プロ」(雨天時のプログラム)を念入りに計画しておく必要がある。会津地方だと、「野口英世記念館」「ダリの美術館」などが考えられるが、宿舎内のできるものもある。「会津蒔絵」「起き上がり小法師」などだ。その中でも会津の郷土玩具「赤べこの絵付け」は、どうしてもさせたかった「雨プロ」であった。

期間中、天気は良くなかったものの、雨プロを実施するほどではなく、「赤べこ」はできなかった。しかしどうしても絵付け体験をさせたかったので、人数分の材料を買い取って、東京まで持ち帰ったのだ。



こんな箱に入っている。箱には完成した「赤べこ」の写真や、由縁が書いてあり、非常に参考になる。



赤べこは紙の「張子」で作られている。しかも絵付けが短時間でできるように、あらかじめ全身が赤く塗られ、首も結合されている。ほぼ完成品で、結構手間のかかる手作業で作られたのだろう。子どもたちは箱から取り出すと、首に触ってみて、上下左右にゆれる「べこ」の姿をすっかり気に入っていた。わくわくしながら、筆や新聞紙を用意していた。